



山登如

# 2020年度 付中通信第1号

## 7年目！

2020.4.1

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

何が7年目かと申しますと、たかちゅうの校長が、です。

附属中学校の初代校長は、先代の理事長でもあった宮川澳男先生でした。就任は1959年。その年は、校名の変更が行われ、戦前から続いた旧制中学校の体制に終止符を打ち、新学制の下で新たな学園の歴史が始まった年でもありました。



校道に満開の桜(入学式の日)

私は今年、2020年も第8代校長としてその任に就いていいますから、61年間に8名の校長が入れ替わったこととなります。したがってその在任期間は割り算により、平均7.63年。私が「7年目！」と言った訳は、ここにあります。母校の校長となったお蔭で、初代の校長から自

分の前任者に至るまで、すべての方々を存じ上げているという、私は、特異な記憶と思い出「を抱えて」、あるいは「に支えられて」歩んでいる校長です。

山口県の場合、公立の校長の1校当たりの在任期間は、ほぼ3年。それに対して私はすでに倍の期間、この職にあります。この間、感慨深い出来事や成果が出たと思えるよい思い出も年を追うごとに増えていきましたが、その一方で情けない失敗や後悔も数多くありました。そして6年間、絶えず揺れ動いてきた思いがありました。実はそれは、教育の最も根幹にかかわる部分、すなわち、どういう教育をすべきか、ということでした。と書けば、何をいまさら校長のくせにと、厳しい視線を向けられる向きもあることは承知しています。

もちろん、建学の精神があります。校訓もあります。設立者の思いを知る文章もあります。しかしそこに現れているのは、誰もが首肯せざるを得ない理念、理想です。したがって、それらは抽象的で、何をどうすればという実践的具体的な方法について

は、後生に任されていると言えるのです。

したがって、後生の一人である私は、現代の状況をよく見極め、先人たちが残してくれた理念を、いかに今、目の前の生徒たちに向かって実現していくか、その方法や手段を考え、実践していかなければならないというわけです。私が

揺れ動いてきたのは、以上のような事情からでした。1年1年が、理念と実践の辻褃合わせの連続でした。この6年間、私の教育への思いは、ここ「たかちゅう」を舞台に変化変容し続けました。それはやはり、グローバル化やAI化、そして少子高齢化によって見る間に変貌を遂げる現実世界への対応に明け暮れていたからだと思います。

だが、もうこの辺で変化も変容も終わらせたいと思います。「7年目！」をよい節目にして、向かうべき教育の目標とそこに至るまでの方法について具体的に記します。

(続きは次号を待て)

